

主 題：アブラハムの信仰8 ―救いは神の力による―
 聖書箇所：ローマ人への手紙 4章22－25節

私たちはこれまで、アブラハムという偉大な信仰者の信仰を見て来ました。「神が言われたことだから、神の約束だから信じる」というのが彼の信仰でした。たとえ、私たち人間には不可能だと思えることでも、絶対に無理だと思うことでも、神が言われたこと、神が約束なさったことは必ず実現すると、そのように信じそのように生きた人物でした。その信仰に対してパウロは「望み得ないときに望みを抱いて信じた」と記したのです。彼の信仰は何があってもぐらつくことはありませんでした。パウロが言うように、彼の信仰はますます強くなっていったのです。なぜ、このような信仰が必要なのでしょうか？このような信仰が大切なのでしょうか？私たちはそのことについて前回学びました。二つの大きな理由がありました。

◎どんなときにも神を信頼して歩むその信仰は、

1. この世に対するすばらしい証となる

なぜなら、私たちは「私の信じている神はこのように信頼に価する方です。このように全能の方です。約束されたことを必ず守られる方です。」と私たちがそのように信じて、そのように行動して行くなれば、私の神はこんなに偉大な方であるというメッセージが周りに伝わって行きます。だから、もし私たちが神を疑い、神の約束を信じないで歩むなら、私たちは間違ったメッセージを世に与えてしまうのです。それは「私たちの神は信頼に価しない神だ。」というメッセージです。そのようなメッセージを世に伝えないためにも、私たちはしっかりと主を仰ぎ見ることが必要です。そして、

2. 神ご自身への私たち信仰者の信頼の証

「神さま、私は何があってもあなたの導きとみわざを受け入れます。」という、このような信仰の態度は、主なる神に対するすばらしい信頼の証です。たとえ、それが自分の祈り求めて来たことと違って、自分の望みと異なっている、みこころを信じることは、主のみこころだけが最善であると信じていることを世に明らかにするのです。けれども、私たちの葛藤はそこにあります。私たちは自分の考えていることがいつも最善と思います。しかし、私たちが「あなたのなさることだけが最善です」とそのように信じてそのように歩んでいるなら、私たちは「神さま、私はあなたを信頼しています。あなたはいつも最善を為して来られました。いつも最善をなさる方ですから、私の思い通りに物事が進んで行かなくても、願い通りに物事が進んでいなくても、私はあなたを信頼します」と言うはずで、皆さん、そのような信仰を神がお喜びになるのです。どんなときにも神の最善を信じて神を信頼し切るそのような信仰はどれ程神に喜ばれるものでしょう。神の言われたことを信じない、神の言われたことに従って行こうとしない、神の言われたことに心からの信頼を置こうとしない、それはみことばの権威を否定していることとなります。「あなたが言われたことを私は信頼できません。あなたの言われたことを私は信じることはできません」と言っているからです。もし、私たちがそのように神のみことばの権威をないがしろにするなら、私たちは絶対に神の栄光を現わすことはないということを私たちは覚えなければいけません。

アブラハムがどのようにして神の栄光を現わしたのか、そのことはすでに見て来ました。彼は、神のおことばを信じてそれに従ったのです。神のおことばに権威を置いたのです。「あなたのことばだから、あなたの言われることだから信じます」と。私たちが「神さまの言われることを信じよう、神さまのおことばを信じます、信頼します。」とそのように神のおことばの権威を認めるといことは、アブラハムがそうであったように、神の栄光を現わすためには不可欠なことなのです。ですから、私たちが見て来たように、信仰者の皆さん、主に対して、神のみことばに対して、私たちは不信仰を捨てなければいけません。神が言われたことを疑うのではなく、神が言われたことを信じる信仰者になることです。もし、私たちが周りに起こる様々な出来事に恐れを抱いて、主への信頼をぐらつかせるなら、また、人間的な考え方や常識などを、神のことばよりも優先しそれらに信頼を置いたりするなら、また、自分の思い通りに物事が進むことだけを考えてみこころを無視して生きるなら、あなたは確実に主の祝福を失います。なぜなら、神の祝福をいただくためには、神のみこころに従って行く道しかないからです。私たち信仰者がこの神に信頼を置いて、まさにアブラハムのように歩んで行くために必要なこと、それは何よりも私たちの神がどんなにすばらしい方であり、この方こそ真に信頼に価するお方であるという、そのことをただ頭で知るだけでなく、心から確信することが必要です。

では、どうすれば私たちは本当に私たちの神はすごい方だ、この方にすべて委ねて、すべて任せてお

けばいいのだ、そのことを神は良しとされた、何という特権を私たちクリスチャンはいただいたのだらうと、このような確信をもって生きて行くことができるのでしょうか？私たちが神への信頼の確信を保ち、増すために必要なことは「神を知ること」です。

◎「神を知る」ために必要なこと

1) 聖書によって

皆さんがよくご存じの通り、神のおことばである聖書をしっかり見ることです。なぜなら、聖書は私たちに「神は信頼に価する方である、神はこのようにすばらしい方である」ということを教えるために与えてくださっているからです。

(1) **教訓の書**：聖書は私たちにどのように生きるべきかを教え教訓を与えてくれると、パウロはこのように言っています。Iコリント10：11「**これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。**」。「**これらのことが彼らに起こったのは、**」とは何のことでしょうか？1節から読むとよく分かります。モーセに率いられて来たイスラエルの民に起こった様々な出来事のことです。彼らが神に対して罪を犯したときに神は彼らを戒められました。彼らは悔い改めて、また神とともに歩み始めますが、また失敗をします。そして、神は戒められます。様々なことが彼らに起こったとパウロは言います。そして、「**それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。**」とあります。つまり、このように様々な出来事が記されている聖書が私たちに与えられたのは、今の私たちに対する教訓だと言うのです。そこには忠告や警告があるのです。神は私たちにこのような過去の様々な失敗を明らかにし、このイスラエルの民が犯した多くの罪に対する神の正しい審判を明らかにすることによって、今の私たちがそのようなさばきを覚えて、正しい行動を取って行くようにと私たちを説得するのです。ですから、このみことばを私たちが学んで行くことによって、このように生きるべき、このように生きてはならないということをしかりと身につけて行くのです。

今、私たちがイスラエルの民の失敗を見ると、そこに私たち自身を見ます。すぐに神から他のところに目を背けてしまう私たち、すぐに世的な様々な思いによって誘惑に惑わされてしまう私たち、余りにも弱く余りにも愚かで罪深い者であることを私たちは何度も思い知らされています。私たちが過去のそのような人たちの生き方を見ることによって、神は私たちにこのように言われます。「そのように歩んではならない！罪から離れてわたしの前を正しく行きなさい。」と。神に逆らい続ける生き方には何の得もありません。自分も嬉しくないし自分から喜びがなくなって行くだけではありません。神の栄光を汚すことになるのです。そして、私たちはその神の前に立つのです。過去に書かれたものは、私たちに対する教訓である、私たちが正しく生きて行くために与えられている教えであるというのです。

(2) **希望を与える書**：同時に、この聖書のみことばは私たちに励ましと希望をもたらすものとパウロは言います。ローマ15：4-5「**昔書かれたものは、すべて私たちを教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。：5 どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてくださいませうに。**」、主が過去になされたすばらしいみわざを思い起こすことによって私たちは励まされます。恐れることはない、彼らと同じように私も主に信頼を置いて歩めばいいのだと、そのような確信が強められ、また、希望のないときでも人々を約束通り導いて来られた主を見上げるときに、この方が私を守ってくださっている、この方が私を導いてくださっている、その真理が私たちに励ましてくれるのです。「感謝です！この全能なる神さまの御手のうちに私は守られている、感謝です！この方がいつも私とともにいてくださる、感謝です！必要を与えるとされた神が私とともにいてくださり、私の必要をご存じであり、その必要を満たしてくださる。」と。

神がなさったすばらしいみわざを見ることによって、私たちは大きな励ましをいただきます。皆さんも経験されていることでしょうか。多くの信仰の勇者たちを見て、彼らが本当に主とともに歩んだ生き方を見て私も励まされるのです。「私もそのように生きて行きたい！」と。神のすばらしいみわざを見、神がいかにご恩寵に満ちあふれたお方であるか、その神の行き届いた完璧なご配慮を見ることによって、このような神が私の神で良かったと、そのように思いませんか？この地上を歩んでいるときも、この方が私をしかりとその力強い右の手で私を捉えてくださり、私を引っ張っていつてくれる。だから、クリスチャンはいつでも希望をもてるのです。希望は私たちのうちにあるのではないのです。神にあるのです。だから、神を見ていないなら私たちは希望を失います。でも、希望の源である神を見ているなら、どのようなときでも神がどのようなみわざをなすのだらうと、そこに期待を置くのです。

紅海を二つに分けることが出来た神です。太陽を動かさないように留まらせることが出来た神です。すべてのものをことばでもってお造りになった神です。どんなことでもおできになる方です。しかも、私のような者を愛し、私のためにいつも最善をなしてくださるお方です。その方を見ることによって私たち

は希望をもつのです。

ですから、パウロがこのローマ書15章で言ったように、昔書かれたものは、私たちに教えるため、また、聖書が教える忍耐と励ましによって私たちが希望をもつためと言うのです。どうですか、皆さん、あなたの心は今、周りの様々なことによって萎えていませんか？喜びが無くなっていませんか？感謝と希望が無くなっていませんか？私たちクリスチャンは、希望を与えてくださる神によって救われたのです。希望を与えてくださる神が私の神なのです。その方がどんなにすばらしいわざをなさったのか、その方がどんなにすばらしい方なのかを知ろうとするなら、私たちはこの聖書のみことばにしっかりと立つことです。このみことばが教えてくれます、私たちの神がどんなに偉大なお方なのかを。いずれにしろ、過去の出来事は今日生きる私たちにとって貴重な教材です。それらをしっかりと覚えて今日生きることです。この神のすばらしさを私たちが覚えるために、その確信を強めて行くために必要なものは、確かに聖書です。

2) 証によって

もう一つは兄弟姉妹の「証」です。神は何のために私たちに「教会」を与えてくださっているのでしょうか？ここに来て人の悪口を言うためではありません。ここに来て人のゴシップをするためではありません。世間話をするためでもありません。私たちクリスチャンがともに集まるとき、クリスチャンたちがお互いを励ましながら「しっかり見るところを見ましょう、神さまはどんなにすばらしい方なのかを見ましょう。」と、一人ひとりが神を見上げたとき、その交わりがどんなに大きな励ましを信仰者にもたらすことでしょうか。私たちが兄弟姉妹と証を為すとき、神に信頼したときに神はこんなにすばらしいことを私に教えてくださった、あの失敗を通して神はこんなに大切なことを私に教えてくださったと、そのような証は兄弟姉妹を励まします。なぜなら、そのような証を聞くことによって、「私もそのように生きていきたい！」と励まされるのではないのでしょうか？ですから、ローマ15：6には「それは、あなたがたが、心をついにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです。」と、信仰者一人ひとりが神の為してくださったみわざを覚え、神がどんなにすばらしい方であるかをしっかり味わい始めると、当然、その人の心の中から神に対する感謝が湧き上がって来るのではないのでしょうか？そのような人々の交わりへと変えられて行くのではないのでしょうか？そして、このような人々の集まっている教会では皆がいっしょになってこの神を称え始めるのです。「神さま、あなたは偉大です！あなたはすばらしい。神さま、私のような者を救ってくださいって感謝します。あなたが私を支えてくださっていますから感謝します。私のこの地上の旅路をしっかり導いてくださることを感謝します。そして、私がこの地上の旅路を終えたときにはあなたのもとに召されて、永遠をあなたとともに生きることを感謝します。」と。もし、私たちクリスチャンが正しくそのことを覚えるなら、パウロが言ったように神を誉め称える者になると思いませんか？そのような人々が集まるなら、心をついにし声を合わせてこの主を誉め称えることになるのです。皆さん、あなたがそのような信仰者になることを神は望んでおられると思いませんか？神のすばらしさをいつも覚えて、その神にいつも信頼を置いているゆえに、内側から湧き上がってくるその方に対する感謝を捧げながら生きる信仰者、そのような信仰者は過去にたくさんいたのです。そして、今もいるのです。そして、あなたも私もそのような信仰者になれるのです。

神はそうに私たちを変えて行こうとされます。個人的に神は私を変えようとされ、そのような個人が集まった教会を神はどれ程喜ばれることでしょうか！私たちは神の命令に対して恐れるのではなく、疑うのでもなく、神のわざを信じ神に期待をもって歩み続けて行くことです。アブラハムがそうであったように。

もう一度、今日のテキストであるローマ書4章に戻ってください。4：22「だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。」、もうすでに私たちが見たように、創世記15：6のみことばをパウロはここで引用するのです。詳しい説明はしませんが、思い出してみてください。「義とみなされた」というのは、勘定に入れられるということです。「転嫁」ということばを私たちは学びました。それは何かを人の勘定につけるとのことです。その不足を補うとか、だれかの口座に何かを振り込むということです。神は私たちにすばらしい贈り物をくださった、神の義を与えてくださったのです。神に受け入れられる義をもっていない私たちの口座に、神はご自身の義を入れてくださったのです。このアブラハムに救いを与えたのは神ご自身です。アブラハムのすばらしい信仰が救いを勝ち取ったのではないのです。アブラハムが神を信じ続けたゆえに救いを勝ち取ったのでもありません。神があわれみをもって彼に救いを与えたのです。アブラハムができたことは、神の言われることを疑わずにそのまま信じることでした。その信仰がこのすばらしい救いを彼にもたらすことになったのです。ガラテヤ3：6に「アブラハムは神を信じ、それが彼の義とみなされました。それと同じことです。」と教えるように、アブラハムは神を信じた、そして、神が彼に救いを与えたのです。

さて、そのことを話して来たパウロは、23節から、今度は話を私たちの方へと向けるのです。「：23

しかし、「彼の義とみなされた。」と書いてあるのは、ただ彼のためだけでなく、**：24 また私たちのためです。」**と、アブラハムから私たちの方へと向けます。そして、ここからアブラハムが救われた信仰と今の私たちが救われるための信仰とを対比するのです。パウロはここで、アブラハムが信じて救いに至ったようにあなたたちも信じる必要があると言うのです。アブラハムは神のおことばを信じました。そして、この神を信じたのです。同じように、私たちが時代がどうであろうと同じように信じる必要があると言うのです。アブラハムと同じように、アブラハムと同じ神を信じるのが大切なのです。

◎アブラハムが救われた信仰と私たちが救われる信仰とを対比して

1) アブラハムは神の啓示を受け入れた：私たちは聖書をいただいている

アブラハムと同じように信じるとはどういうことでしょうか？アブラハムは神の啓示を信じて受け入れました。つまり、神が語られたこと、神の約束を真実として受け入れたのです。アブラハムに与えられた啓示というのは非常に限られていました。でも、神がアブラハムに与えたおことば、神がアブラハムに与えた約束をアブラハムは受け入れたのです。それを信じたのです。それがアブラハムでした。

私たちはどうでしょう？私たちが神の与えてくださる啓示を受け入れます。でも、彼が得ていた啓示と、私たちが得ている啓示とは違います。その量は比べものになりません。私たちはアブラハムよりはるかに豊富な啓示を神からいただいています。神がどのようなお方であるのか、神はこの世に対してこれからどのように事をなさるのか、また、救いに関する神のご計画や約束など、アブラハムには知らされていなかったこと、彼が知らなかったことを私たちは神の啓示によって知ったのです。アブラハムは私たちが持っている聖書を持っていませんでした。アブラハムが神からいただいたおことばは非常に限られていたのです。神の啓示は完成したのです。もう新たに神が特別な啓示を与えることはありません。神の啓示はこの聖書に記されているからです。私たちは聖書を見るとき、神がどんなお方であり、どのようなことを計画され、どのようなことを望んでおられるのか、そのすべてを知ることが出来ます。アブラハムが知らなかったことを私たちはこの神の啓示である聖書を通して知ることが出来るのです。

そうすると、アブラハムは与えられた啓示を受け入れた、私たちが与えられている啓示を受け入れるということは、神のおことばをそのまま受け入れることなのです。アブラハムがそうであったように、神がお語りになることを私たちは「神さま、私は信じます。あなたが言われたことを信じます。あなたの約束を信じます。」と、そのような態度をもって私たちは神の啓示を、おことばを、受け入れて行くことです。私たちはこの聖書を通して、イエスを信じる者に永遠のいのちが与えられると教えられています。私たちはそれを見たときに「私は、信じます」と言いました。イエス・キリストを信じた者は罪の赦しをいただき、その赦しは永遠に失われることはないと言います。私たちは「信じます」と言います。この救いは自分の行ないによるのではなく神の一方的な恵みによるとそのように教えられています。私たちは「信じます。あなたの言われることはその通りです」と言います。神のおことばは真実であり、その約束は必ず成就すると言います。私たちは「信じます」と言います。このようなリストはもっと続きます。神が言われたことに対して、私たちは「このようなことは信じられない」ではなくて、「神さまの言われたことを信じます」と言います。これがアブラハムの信仰だったのです。このような信仰をもってあなたが神のおことばを受け入れているかどうかです。信じたいところだけを信じ、信じたくないところは信じない、そのような信仰ではないのです。都合の良いところだけを受け入れるなどというのではなく、「神の言われたことはその通りだ。」とそのような強い確信をもって、「これは真実である、だから私は信じます」と、あなたはそのような信仰をもっておられますか？

2) アブラハムが信じた神：その同じ神を私たちは信じる必要がある

私たちがアブラハムが信じたその同じ神を信じること、パウロが話すみことばを見るとその点をとっても強調しようとしていることが分かります。そのことを話す前に、アブラハムはどのような神を信じたのでしょうか？17節で私たちはすでに見ました。4：17「**このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。**」、つまり、アブラハムが信じた神はどのような神なのか？「**死者を生かし、無いものを有るものように**」、そのように無いものから創造なさる神であると、私たちはすでに見て来ました。パウロはその中で「**死者を生かす**」というこの点を特に強調しています。というのは、17節にあるこのことばが24節で「**また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。**」と使われています。「**死者の中からよみがえらせた**」、その神を信じるのだと言います。アブラハムが17節に記されている「**死者を生かす**」神を信じたと言うのです。これは何を指しているのでしょうか？

◎「死者を生かす神」とは？

(1) サラの胎が開かれたこと

一つはもう私たちがすでに学んだことです。アブラハムもサラももう子どもを産むことは不可能な年齢でした。絶対にあり得ないこと、サラのからだは死んでいるのも同然だったとありました。そのよう

なからだを神は用いてイサクを与えたのです。ですから、ここにあるように「死者を生かす」方であると言うのです。死んだのも同然のからだから神は新しいのちを誕生させたのです。それは私たちがすでに見たことです。

(2) よみがえらせた方を信じる

アブラハムが信じた「死者を生かす神」とは、ヘブル人への手紙の中にこのことに対して著者はこのように教えている箇所があります。11:19「彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。」、これはアブラハムがイサクをささげたときのことで、神がアブラハムに愛するイサクをささげなさいと言われたとき、アブラハムはその通りささげました。これは親として大変なことです。しかし、アブラハムにそのような行為、忠実に神に従って行くという行為に至らせたその思いは何だったのでしょうか？アブラハムは信じていたのです。たとえ、私がここでイサクを殺したとしても必ず神の約束があると。つまり、イサクから出る者が増え広がって行く、だから、神はこの約束を果たすために私がここでイサクを殺したとしても、神はイサクをよみがえらせてこの約束を成就なさるに違いないという信仰です。ですから、死者をよみがえらせることが出来る神、「死者を生かす」神、このような信仰をアブラハムは持っていたのです。

神はみこころなら、子どもを産むことなど絶対に出来ない者に子どもを与えることができるし、また、死んでしまった者でもその死からよみがえらせることが出来ると、そのように信じた、それが彼の信仰です。そのような神をアブラハムは信じていたのです。

では、私たちはどうでしょう？アブラハムが信じていたように、私の神は子どもを与えることも死者をその死からよみがえらすことも出来ると、そのように信じる必要があります。ただ、先程も話したように、私たちは神のこの完成された啓示をいただいている者として、アブラハムが知っていた以上に、私たちは知っています。そこでパウロはこのような説明を加えています。確かに、神はみこころなら死者をよみがえらすことができる方です。24節でパウロは、そのよみがえりに関してある出来事を記しています。「私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる」と。この神はイエス・キリストを死後三日目にその死からよみがえらせた方だと言うのです。アブラハムはそのようなことを知る由もなかったのです。でも、私たちは確かに今から二千年前の出来事ですが、神が記された啓示である聖書によって、確かに、イエスは死なれたけれど三日後によみがえって来られた、そのように死んだ者をよみがえらせることが出来る、それがアブラハムが信じた神である、そして、私たちが信じるべき神であると言うのです。私たちも同じ神を信じる必要がありますと、そのことをパウロは強調しているのです。

なぜ、パウロはそのことを強調したのでしょうか？24節では「イエスを信じる」とは言っていません。「私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる」と、つまり、父なる神のことを言っているのです。お気づきでしょうか？パウロは「イエスを信じなさい」とは言っていません。「イエスをよみがえらせた父なる神を信じる」と言ったのです。思い出してください。この手紙を送ったパウロは、その読者の中にパウロの教える救いとアブラハムの救いが別のものであるかのように疑っていた人たちがいたということを。だからパウロは、彼らが愛し彼らが尊敬していたアブラハムの救いの例を挙げて、パウロが語っている救いのメッセージとアブラハムが信じた神は同じだと言うのです。つまり、救いとは神の恵みであると、そのことを明らかにしようとしたのです。だから、ここでもアブラハムが信じた神、それはあのイエス・キリストを死からよみがえらせた神である、その方を信じることによって、あなたはアブラハムが信じたその同じ神を信じることになるのだと言っているのです。パウロはこうして、読者に彼が語っているメッセージが今まで神が語ってきたメッセージと全く違わない、同じだということを明らかにしようとしたのです。アブラハムが信じた神を、どのように時代が変わろうと私たちも同じように信じる必要があるのだと。

続いて25節で、この啓示が与えられることによってより明らかにされたこと、すなわち、イエス・キリストの死、よみがえりがいったいどういう意味をもっていたのか、その説明を加えています。「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」と。特に、皆さんに注目していただきたいのは「私たちの罪のために」ということばです。そして、「私たちが義と認められるために」とこのように「ために」という前置詞が二つ使われていることです。どちらも目的を記しています。

(1) 私たちの罪のために

「私たちの罪のために死に渡され」、これは「死に引き渡された、処刑された」という意味です。「罪のゆえに」と、これはイエス・キリストの十字架であることは明らかです。では、何のためにイエスが十字架にかかって処刑されたのでしょうか？それは「私たちの罪のために」、これが目的です。ですから、イエス・キリストが十字架にかかって死なれたその目的は「私のためだった」と言うのです。Ⅱコリント5:21には「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であって、

神の義となるためです。」と書かれています。「罪を知らない方」、つまり、罪の全くない聖い方を罪とされたというのです。だれのために？罪のある私たちのためです。ここでパウロは、罪のないイエスの上に私たちの罪をそっくり負わせたと言っているのです。彼は私たちの身代わりだと言ったのです。イザヤ53：4-5「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。：5しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」、今、私たちはこのみことばを見ると、これはあのイエス・キリストの預言であると見ます。なぜなら、明らかにここに記されていることをイエスは為してくださったからです。「彼は私たちの病を負い」、私たちの肉体的病のことではありません。私たちの心の問題です。罪に染まった私たち、肉体的にも確かに不治の病があります。でも、私たちの心の病、このたましいの病のことを言っています。この霊的な病は私たちにはどうすることも出来ません。生まれながらに人間は皆汚染されていて、その病にかかって地獄に向かっていたのです。私たちは全くどうすることも出来ない、この病に関しては全く無力でした。そのことです。しかし、その罪をイエスは負ってくださったのです。

そして、イザヤ53：10「しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、主のみみこころは彼によって成し遂げられる。」、イザヤは言います。私たちにはどうすることも出来ないこの罪に汚染された者、その病をその身に負ってその病の解決をもたらしてくださろうとする救い主、このすべて一連の出来事は神のご計画だったと言うのです。「彼を砕いて、痛めることは主のみみこころであった。」と、この主、救い主を殺すことは主のみみこころであった、神のご計画であったと言うのです。それまでして神は私たちのような罪人をその罪から救おうとなさったのです。しかも「彼は末長く、子孫を見ることができる」と言うのです。

「罪過のためのいけにえとするなら、」救い主がご自分のいのちを罪人の身代わりとして、いけにえとして捨てるなら「彼は末長く、子孫を見ることができる」、この救い主を信じることによって、信じた人々には神の子どもとされる特権をお与えになった、子孫を見るということです。救い主の犠牲によって、この救い主が十字架であなたや私の身代わりとなって死んでくださったことによって、そのイエス・キリストを信じる者は罪赦されて神の子となるのです。そのように神を信じる者たちの子孫が増え広がるということです。この贖い、この救いのみわざはすべて神のご計画だったのです。もし、私たちに罪がなければイエスは十字架にかかる必要はなかったのです。神がこのように人としてこの世に来る必要はなかったのです。そして、その神が私たちの罪を負って十字架で死ぬ必要はなかったのです。でも、私たちに罪があるために、神は主イエス・キリストをこの世に送り、そのイエス・キリストのうちに私たちのすべての罪を負わせたのです。

(2) 私たちが義と認められるために

二つ目には、「私たちが義と認められるために」よみがえられたと言います。ここで勘違いしてはならないことは、イエスがよみがえることによってそのことを信じる者たちに救いが与えられるということではありません。よみがえりを信じることによって救われるということではないのです。「よみがえり」にはある目的があったということです。それは「私たちが義と認められるため」です。「義と認められる」、「救われる」ことはイエス・キリストを信じることによって与えられるのです。では、「よみがえり」は何だったのでしょうか？イエス・キリストの復活はイエス・キリストが私たちの罪を赦してくださるいけにえとして完全なものであるということです。このイエス・キリストのいけにえは、私たちの罪を完全に赦す上において有効であると、そのことを証明した神のみわざだったのです。どういうことか、もう一度復習しましょう。イエス・キリストがこの世にお見えになったときバプテスマのヨハネはイエスを見てこのように言いました。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」(ヨハネ1：29b)と。なぜ、そのように言ったのでしょうか？彼はいけにえとしてこの世に来たからです。そして、このいけにえは私たちの罪を負って十字架で死んでくださった。あなたのすべての罪をその身に負って、身代わりに十字架で死んでくださったのです。そして、そのイエスをだれがよみがえらせたのでしょうか？「死に渡された」も「よみがえらされた」も受け身です。神のなさったみわざなのです。父なる神がイエス・キリストをその死からよみがえらせたのです。それには目的がありました。イエスがよみがえることによって、父なる神はこのイエスの死は信じるすべての罪人の罪を赦すのに十分であることを証明したのです。もうこれで十分だ、これ以上何もしなくていいと言うのです。

例えば、私たちがレストランに行って食事をすると請求書が来ます。そのお金を払ったなら、それ以上にまだ他に払う必要がありますか？請求されたものを払えばそれで十分です？私たち罪を犯した者が神から請求されたものはそのいのちでした。それをイエス・キリストが身代わりに払ってくださった。ご自分のいのちを捨てるということによって、イエス・キリストは私たちのすべての罪の代価を払ってくださったのです。私たちが支払わなければならないものがもう残っていることはないのです。全

部イエスによって支払われたのです。そのことの証明なのです。だから、イエス・キリストはよみがえった、神がよみがえらせたと言うのです。

もう一つ考えられることは、この「いけにえ」は信じるすべての罪人を完全に永遠に赦す力があることの証明です。この方こそが真の、唯一の救い主であることを明らかにされたのです。父なる神がイエス・キリストを死からよみがえらすことによって、この方だけが人間のすべての罪を赦すことが出来るのです。だから私たちは、よみがえりを見るときに心から主に感謝するのです。イエスを信じたなら罪が赦される、このイエスによってすべての罪が永遠に赦されると。ジョン・マレーという神学者は「イエスは我々の罪を有効に処理されるために死に渡されたのである。そして、イエスは我々の義認を保証するためによみがえられた。」と言います。イエスの死はあなたのすべての罪を処理するために、神があなたのために為してくださったことです。そして、イエス・キリストのよみがえりはイエスを信じたあなたの罪が完全に赦されて、永遠に救われて救いを失うことが決してないこと、この方が本当の救い主であることを保証するために神がなさったみわざだと言うのです。イエスを信じることによって確実に罪の赦しをいただくのです。

アブラハムはどのような信仰を持ったのか？パウロはそのことを教えて来ました。パウロが教えたかったことは、アブラハムは信仰によって神の恵みによって救われたということです。それは私たちが救われるのと全く同じことです。だから、この4章の中でパウロは「信仰によって救われる。神の恵みによって救われる。神の力によって救われる。私たちの働きではない。」ということをお説きになって来たのです。それがアブラハムの救いであり、そして、あなたもその救いにあずかろうとするなら、アブラハムと同じように神を信じること、アブラハムと同じ神を信じるが必要だと言うのです。この方を信じ、この方を信じ続け神のおことばに従い続けたアブラハム、私たちに大きな模範を示してくれました。神を信じ、どのようなときでもそのみことばに従い続けて行こうとすること、それが彼が祝された理由であり、それが神が私たちに望んでおられることです。

明治19年、アメリカの東海岸で D.L. ムーディーが伝道集会を行っていました。その時の賛美をリードしていたダニエル・トナーはその集会の中でなされた一人の青年の証を聞きました。その青年のことばを彼は記してサミスという牧師にその手紙を送りました。サミス牧師は次のような歌詞を書きそれが讃美歌として世界中で歌われています。その歌詞のコーラスの部分にはこのようにあります。「げに主は、より頼みて、従う者を恵みたまわん。」と、これが日本語に訳された歌詞ですが、彼が書いた元の詩はこのように記されています。「信頼して従え、イエスにあって幸せになる道は他にはない。信頼して従え。」と。D.L. ムーディーはある時、クリスチャンとして成功するための信条を次のように語りました。

「一つ、イエスの血だけが我々を安全にする。二つ、イエスのみことばだけが我々に確信を与える。三つ、しかし従順だけが我々を幸せにする。」と。このような信仰者になりたいものです。どんな時にも主を信頼する信仰者に。なぜなら、皆さん、私たちの神は信頼に価するお方です。全能であり全知であるただひとりの神です。この方に信頼を置いて生きることが出来るということは、私たちクリスチャンにとって大きな祝福です。そのように生きることです。そして、主の栄光を現わすことです。